
御正月みにみすてり～

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御正月みにみすてり

【Nコード】

N5896B

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

正月早々の殺人事件手がかりがなく捜査は難航するが千葉が意外な推理力を見せる。

「先ほど、こちらを訪れて、お父様の御遺体を発見されたと言う事です
すね」

狭い部屋で、鑑識が何人も仕事をする中、

男は佐藤の前に呆然と立っていた。

「はい、父は、母を捨てて、東京に、やってきて、もう、40年になります。

ずっと消息がわからなかったのですが、相手の女に逃げられて、

こちらで、日雇いをやって暮らしている

と言う事を東京の知人から聞かしまして・・・。

体も悪くしていると言う事でしたし、年も70越していますから、もう、許してやって故郷に連れ戻そう、

と家族で話し合いました、今日迎えに来て・・・」

途切れ途切れに男は話した。

「呼びかけても返事がなくて・・・私は、連絡してなかったんです。

父は妙にプライドが高い所が昔からありまして、

私があると知ると姿を隠してしまうかも、と。

私の仕事の都合と、この元日なら絶対自宅にいるだろう、

と思って上京したのですが

でも・・・こんな」

絶句した男を前にして、佐藤は考えた。

“父親を今だ恨んでいるかもしれない。犯行の動機はないとはいえない”

千葉が佐藤のところに来てきた。

「佐藤さん、ここの管理人さんが、夜中の1時ごろ争う声を聞いたそうです。

相手は、男性。相手も、被害者と同じ御国言葉を使っていたそうです」

佐藤は、目の前の男に聞いた。

「栗林さん、東京駅に着かれたのは何時ごろですか？」

「いえ、羽田です。高松空港から飛行機で来ました。」

ついたのは、10時頃でしょうか」

「高松。香川県のご出身ですか？」

「はい、さぬきうどんの店をやっております」

男は、自分が疑われているなど思ってもいない様子だった。

男の携帯がなった。

どうやら、自分の妻からしかった。

動揺をあらわに今の状況を話す男の言葉は、

佐藤と話すのとは違って変わって御国言葉になっている。

”金品が取られているから、強盗の線も、捨てるわけには行かないけど、昨日は大晦日。年越しで、起きていた可能性が強いから、強盗がこっそり忍び込むのは難しい。

だから、強盗に見せかけた同郷の知人と言う可能性が強いわね。

その知人が息子であってもおかしくはないし。

まずは、アパートに住人に聞き込みして、もっと争う声を聞いた人や、

見知らぬ人物が出入りしたのを見た人がいないかどうかを聞かなくては“

佐藤は、被害者の息子を、警官に預け、千葉と共にアパートの聞き込みに出た。

今にもくずれそうなアパートは2階建てで、六世帯が住んでいた。

どの世帯も、一人暮らしの老人ばかりという事だった。

「このアパートには、被害者と同郷の人はいないのかしら？」

佐藤の問いに千葉が答えた。

「管理人さんの御話によると、被害者の他にはいないそうですが・・・

あ、いい匂い、御雑煮を作ってるのかな。お腹すいたなあ」
確かに、アパートから、料理をする匂いが漂っている。

「ウーン、こっちの部屋からだ」

匂いに惹かれるように歩き出した千葉の後を佐藤は追いかけた。

「ちよつと、千葉君、お昼ご飯は、仕事が一段落ついてからよ!」

千葉は佐藤にかまわず、坂出と書かれた表札のあるアパートの一室のドアをノックした。

「あけましておめでとうございます」

目の落ち窪んだ老人が、笑顔で挨拶する千葉を見て、

胡散臭そうにしながら、口の周りをぬぐった。

「どうやら、食事の最中だったらしかった。」

“千葉君、まさか、ご飯下さいなんて言うじゃないでしょうね。

やだ、捜査中にご飯を恵んでもらうなんて前代未聞の不祥事だわ!

高木君!どうして、御正月に実家に帰っちゃったの!”

しかし、千葉は佐藤が、思いもかけないことを言った。

「坂出さん、あなた香川のご出身ですね」

坂出老人は、動揺を露にした。

「違う!何を証拠にそんな事を言うんだ!」

「嘘をついても無駄です。」

警察を舐めてはいけませんよ。

何もかもちゃんと調べはついてるんですからね」

老人は、目を見開いて、千葉を見た。

千葉はいつもの笑顔のまま老人を見つめる。

老人の額の血管が浮き出す。

佐藤はそのまま彼が、脳卒中でも起こして倒れるのではないかと心配になった。

やがて、老人はがつくり膝をついた。

「もうし・・・わけ・・・ありません。」

正月を迎えるにも金がなくて・・・

たまたま、同郷だと知った、栗林さんから金を借りようと・・・

でも断られて・・・」

あまりの意外な成り行きに立ちすくむ佐藤の前で、

千葉は優しく老人を助け起こした。

「さあ、こんな寒い所で、立ち話もなんですから、あとの御話は署の方で伺いますよ」

「千葉君、どうして、あの人が、香川出身だってわかったの？」

東京へ出て、50年、なまりを笑われて以来、

御国言葉をほとんど使わなかったそうよ。

だから、自分からいわない限り、誰にも香川出身なんてわからなかったって」

「御雑煮、ですよ」

「御雑煮??」

「このあたりは、かつおダシの雑煮が多いんですよ。」

実際あのアパートから漂ってくるダシの匂いはほとんどが、かつおダシの匂いでした。

でも、坂出さんの部屋からはいりこダシの匂いがしてました。

それで、怪しいと思ったんですよ。

で、玄関に入ったら、白味噌の匂いもしてましたし、

おまけに口の周りにあんこがついてました。

家庭によつて、多少、違いはあるんですけど、

香川の方の御雑煮はいりこダシで白味噌仕立て。

そしてあん餅が入るのが特徴なんです。

故郷を捨てても、故郷の味は忘れられなかったんでしょうね。

言葉も、同郷の栗林さんと話していて、一時的になまりが戻ったんでしょう。

現場から、発作的な犯行のように思えましたし、ハツタリ聞かせたら案外すんなり自白するかも、と思ったんですよ。うまくいってよかったです。」

佐藤は、お菓子を食べつつ、笑顔で話す千葉を、新たな驚きをもって見つめたのであった。

（おまけ）

1月4日。

「佐藤さん、3が日の勤務御疲れ様です。

千葉、お前、また食ってんのか？3が日で、体形が丸くなってるぞ。ほら、鏡餅」

登庁した、高木は、御土産のみかんを、千葉の頭の上に乗せた。

すると、佐藤が勢い良くやってきて、高木の手からみかんを取り上げた。

「ちよつと、高木君。千葉君はねえ、ただ食べているだけじゃないのよ。

からかわないでちょうだい！」

足音も荒く去っていく、佐藤を高木は、茫然として見つめた。

“佐藤さん、三が日の間に千葉と何があっただんですかあゝ”

正月早々疑心暗鬼な高木であつた。

（後書き）

これも某サイトにあげていただいていたものです。

甘党の私は、このお雑煮を一度

食べてみたいと思っています。

ネットで調べれば作り方は分かるのですが

いまだ作る勇氣はなし。

どこかで売ってないかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5896b/>

御正月みにみすてり～

2010年10月10日16時30分発行